

## Herman Melville の “The Two Temples” について

岡 村 仁 一

### 1. はじめに

Melville の作品, “The Two Temples” は他の二作, “Poor Man’s Pudding and Rich Man’s Crumbs”, “The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids” と共に, 二つの小話が一緒になって一つの作品をなしている “two-part pieces” (Sealts, 492) の一つである。この “two-part pieces” 三部作の特徴としては, 共通の語り手 “I” (私) が二つのパートを相前後して体験し, 何らかの結論を得るもので, その舞台も一方が米国, もう一方が英国というものである故, 一般の読者が英国と聞いて持つイメージ即ち「階級社会」, 米国と聞いて持つイメージ即ち「自由・平等」を翻すことが意図されているように思える。

本論では作品 “The Two Temples” に的を絞って, “two-part piece” という手法ならではのテーマ設定とその効果について検証していきたい。

### 2. TEMPLE FIRST

この最初のパート, “TEMPLE FIRST” ではマンハッタンにある教会が舞台になっている。日曜日の朝, 語り手はバッテリー公園から祈禱書片手にはるばる 3 マイルの道程を歩いて教会にやってくる。しかしながら, 熱心な信者と見られてしかるべき語り手は「寺男風の太鼓腹の大男 (the great, fat-paunched, beadle-faced man)」(303) に, 中に入るのを拒否されてしまう。語り手は, 何故教会内に入れてもらえないのであろうか? と周りを見回してみる。すると語り手は「歩道の縁石に沿って駐められている絢爛たる馬車の数々 (a noble string of flashing carriages drawn up along the curb)」(303) に気づき, 次のように言う。

See the gold hat-bands too, and other gorgeous trimmings, on those glossy groups of low-voiced gossippers near by. If I were in England now, I should think those chaps a company of royal dukes, right honorable barons & c. As it is, though, I guess they are only lackeys. (303-4)

近くのそこかしこで群れをなしてこそこそ噂話に夢中になっている見かけの良い連中の帽子の金色のリボンや豪華な飾りを見るがいい。もしここが英国なら, この連中は高貴な公爵や男爵が集まっているのだときっと思うことだろう。ところが実体は中で祈りを捧げている人たちの従僕に過ぎないのだ。

この場面には, 自由・平等を標榜する国アメリカに公爵・男爵はいないものの, それに代わる「貧富」という新たな階級が出来上がりつつあることが象徴的に描かれている。「もし新調した服が昨夜間に合っていたら (had my new coat been done last night)」(303), そして「あの寺男風の太鼓腹の大男にお札の一枚でも握らせてやっていたら (had I . . . tickled the fat-paunched, beadle-faced man’s palm with a

bank-note)」(303)と語り手は後悔しているが、新たな階級社会が出来つつあるこの国ではもはや教会といえども信仰の有無といったいわば天上の論理は通用せず、貨幣経済という地上の論理に従い、袖の下を渡すといった世俗的な知恵がなければ通用しないことが暗示されている。

そして「これでは貧乏人は歓迎しないと言ったのと同じではないか(Just the same as if he'd said, they did n't entertain poor folks.)」(303)と憤慨するも、ひとり、教会堂の外に突っ立っていることにやりきれなさを覚えた語り手はその場を離れようとする。だがここで偶然、語り手は本堂の脇に立つ教会の塔の中につながっていると思われる小さな入り口を発見する。しかもなんと、ドアには鍵が掛かっていない。こうして語り手は塔の中に入っていくことになる。

石段を五十歩ほど上り、踊り場に出た語り手は、そこで例の寺男風の男が次のパート、“TEMPLE SECOND”に登場するビール売りの少年の前触れのごとくここに置かれている「三人の褴褛を纏った少年(three ragged little boys)」(304)を外に追い出しているのを目撃し、いったんは怯んでそこで引き返そうとするが、「眼下で繰り広げられる雄大な業の舞台を鳥のごとく一望(a glorious bird's-eye view of the entire field of operations below)」(304)したいと意を決して「ヤコブの梯子ともいうべき高い木造の階段(another Jacob's ladder of lofty steps, — wooden ones)」(304)を登っていくことにする。ここで「ヤコブの梯子」が登場するのは偶然ではない。語り手が塔を登るという行為は「地上の人間の営み(operations below)」を地上の人間の視線とは別の天上からの視線(a bird's-eye view)、つまり地上の論理ではなく、より大局的な、いわば天上の論理で見直そうという試みである。

そしてその天上までの階段を途中まで登り、オルガンの奏でる賛美歌の調べを耳にした語り手は帽子を脱ぎ、祈禱書を取り出して、その敬虔な賛美歌に参加したつもりになる。それが終わるや、語り手はまた登り続け、とうとう塔と本堂をつなぐ円い窓のところに到着する。

But I was hardly prepared to find that no pane of glass, stained or unstained, was to stand between me and the far-under aisles and altar. For the purpose of ventilation, doubtless, the opening had been left unsupplied with sash of any sort. But a sheet of fine-woven, gauzy wire-work was in place of that. (305)

ステンドグラスであれ、透明ガラスであれ、はるか下の通路や祭壇と私との間にあるはずの窓ガラスが無いとはほとんど予想外であった。紛うことなく換気のためにその開口部分にはいかなる窓枠も取り付けられておらず、その代わりに目の細かなガーゼ状の金網が被せられていた。

語り手は当初、自分と本堂とを繋ぐ円い窓がガラス窓であることを想定していたが、ガラスを通して眺めるということは、対象をヴィジョンとして捉える、つまり概念として理解することを意味している。それに対してガラスの代わりに置かれていた「目の細かなガーゼ状の金網」(gauzy wirework)は何を意味しているのであろうか？

When, all eagerness, and open book in hand, I first advanced to stand before the window, I involuntarily shrank, as from before the mouth of a furnace, upon suddenly feeling a forceful puff of strange, heated air, blown, as by a blacksmith's bellows, full into my face and lungs. (305)

最初私はその窓の前に立とうと開いた祈禱書片手に夢中で突き進んだが、突然、鍛冶屋のふいごから噴き出すかの様な強烈な異様な熱気が私の顔と肺を襲ってくるのを感じ、思わず身じろぎした。

自らを対象の外に置き、そこから対象を単にヴィジョンとして捉え、概念として掌握すれば由とするガラス窓とは異なり、この金網は自らを対象と同空間に置き、同じ空気に触れ、頭で考える理屈ではなく、自ら体験することにより認識することを迫っているのである。

それではこの実体験を経て、語り手は何を認識したのであろうか？

The furnace which makes the people below there feel so snug and cosy in their padded pews, is to me, who stand here upon the naked gallery, cause of grievous trouble. (305)

あの遙か下において、クッションを敷いた座席に座っている人たちは暖炉のおかげで心地よく暖かく感じるのだろうが、敷物もなにもない通路に立っている私にとってはその暖炉が辛い悩みの種なのだ。

下の快適な空間に身を置く会衆は、熱せられた空気は上昇する、という理屈は分かっている、実際、自らの居場所を快適に保つことが他に不快な環境を生み出している、ということにまで考えが及ばない。これは現代の我々の暮らしについても言えることで、先進国のエア・コンディショニングされた住空間に身を置くものは、自らの快適な暮らしが地球の温暖化を助長し、砂漠化や海面上昇を引き起こしていることなど知る山もなく、現地に行ってみないと温暖化で苦しむ人たちの暮らしは実感できない。塔に登るという行為を経て、いったん地上の視点を離れ、天上の視点から物事を眺め、それを体験することにより、語り手はこの認識を深めたのである。この経験をを経て語り手は次のように言っている。

Height, somehow, hath devotion in it. The archangelic anthems are raised in a lofty place. All the good shall go to such an one. Yes, Heaven is high. (306)

高みはそれ自体の中に信仰を有している。大天使の聖歌はいと高き所でこそ歌われるものだ。善なるものはすべてそのようなところに行くべきだ。そうだ、天国はやはり高い所にあるのだ。

続いて語り手は円い窓越しに教会堂内部の様子を観察するが、その光景はガーゼ状の金網の効果もあり、なにやら「芝居じみて (theatric) | 見え、| ある狡猾な魔術師の見せ物 (some sly enchanter's show) | (306) ではあるまいか、とさえ思われる。やがて始まる説教のテーマ、それは「汝らは地の塩なり (Ye are the salt of the earth.) | (307) である。この「汝らは地の塩なり。塩もし効力を失わば、何をもてか之に塩すべき」(文語訳「マタイ傳」5:13) というイエスの教えは「『なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし』と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ」(5:43-33) であるとか、「なんぢら己がために財寶を地に積むな…なんぢら己がために財寶を天に積み」(6:19-20) といった有名な教えと並び「マタイ伝」第5章から第7章にかけて登場する所謂「山上の垂訓」の一節をなしている。ここでいわれている「塩」とは人間を人間たらしめている最も大切なもの、すなわち「愛」を指していると思われるが、その後の説教の内容については一切触られていない。イエスはこの教えを「山に登り」(5:1) 弟子たちに言われたとされているが、この高みに登る行為は語り手が塔に登ると偶然の一致とは思えない。「芝居じみた」説教の内容を詳しく述べたところでガラス越しの光景の描写と変わらない。やはり「地の塩」の教えも直接自ら体験すること無しには効力を発揮しないのである。そしてまさにその体験が、後ほど述べる様に、この“TEMPLE FIRST”と好対照を成して“TEMPLE SECOND”に置かれているのである。これぞまさしく“two-part piece”の本領発揮というところであろうか。

その後、オルガンの響きとともに説教は終わり、会衆は「タタタ立ち去っていく。語り手も「ヤコブの梯子」を下りて踊り場まで戻り、更に石段を下り、出口にたどり着くが、何と、今度はドアに鍵が掛かっている。どうしてよいか判らない語り手は無意識のうちにまた金網の通風孔のところまで引き返す。「広大な劇場をもう一度覗いてみて、その静寂につつまれた荒涼さにぎくりとした (Snatching another peep down into the vast arena, I started at its hushed desertness.)」語り手は堂内の様子を次の様に描写している。

The long ranges of grouped columns down the nave, and clusterings of them into copses about the corners of the transept; together with the subdued, dim-streaming light from the autumnal glasses; all assumed a secluded and deep-wooded air. I seemed gazing from Pisgah into the forests of old Canaan. A Puseyitish painting of a Madonna and child, adorning a lower window, seemed showing to me the sole tenants of this painted wilderness — the true Hagar and her Ishmael. — (307-8)

本堂の身廊沿いに円柱が続き、それが翼廊の角のあたりで群がって雑木林となり、秋色に染められた

ステンドグラスからぼんやりと射しこんでくる淡い光と相俟っていずれも人里離れた奥深い森の雰囲気を感じさせていた。私はピスガ山からいしへのカナーンの森を覗き見ている様に思えた。低い窓を飾っている（カトリックとの連携を伺わせる）ビュージ派風の聖母子像は私にはこの彩られた荒野の唯一の住人であり、（荒野に捨てられた）正真正銘のハガルとイスマエル母子であることを示している様に思えた。

モーセがそこに登って約束の地、カナーンを垣間見たといわれる「ピスガ山からの眺望」がここに登場するのも偶然ではあるまい。それによると、窓を飾る聖母子像がこの教会の唯一の住人で、荒野に捨てられたイスマエルとハガル母子に見えたと記されているが、この記述は、当教会では、自ら説く教えがガラス窓越しに見られるのみで全く実践されていないイエスの孤独を物語っている様である。

再度踊り場まで戻った語り手は最終手段として、そこで見つけた教会堂の鐘を鳴らす綱を引く。ほんのちよっぴり鳴らすだけのつもりだったのに大音響が響き渡り、あの太鼓腹の大男が駆けつけてくる。語り手は警官に引き渡され、翌日、裁判所に出頭する羽目となり、相当の科料を支払い、きつい叱責を受けて漸く釈放される、というところでこの最初のパートは終わる。

### 3. TEMPLE SECOND

“TEMPLE FIRST”のパートで教会から追い出された後、語り手は二人の女性の世話役という職を得てロンドンまで行動を共にする。しかし女性らの予定の変更により、その地で解雇され一文無しになってしまう。衣類を質入れして何とか生きるために職を探す毎日を送る語り手は、土曜日の晩、買い物をする人の波にのまれ、思わず次のように漏らす。

Well, well, if this were but Sunday now, I might conciliate some kind female pew-opener, and rest me in some inn-like chapel, upon some stranger's outside bench. (311-12)

やれやれ、今日が日曜であったなら、信徒席案内嬢を懐柔して何処かの宿屋代わりの教会堂で一見さん用部外者ベンチで休むこともできたというのに。

この言葉から“the First Temple”で酷い目に逢った語り手が「教会」というものに最早一切幻想を抱いておらず、便宜的に「宿屋代わり (inn-like)」と見なし、寺男に懲りた語り手が「案内嬢」を世俗的に「懐柔」しようとしていることが伺える。

雑踏の中から何とか逃れた語り手は静かな通りに出る。その様子は次のように描かれている。

The comparative quietude of the place was inexpressively soothing. It was like emerging upon the green enclosure surrounding some Cathedral church, where sanctity makes all things still. (311)

比較的静かなこの場所は、えも言われぬ心の落ち着きを感じさせてくれた。神聖なところであるが故に、いっさいのものが静寂になる、なにかそういった大聖堂を取り囲む緑の閑地に出た感じだった。

語り手にとって、これは本来果たすべき機能を失った「教会」に代わる新たな場所との出会いを予感させる記述である。ここで語り手は広告用のポスターを見つける。それは「名俳優マクレディが枢機卿リシュリュウの役を演じる (the stately Macready in the part of Cardinal Richelieu)」（311）というものだった。それを読んでいるうちに「徐々にこの名だたる役を演じる名俳優マクレディを見てみたいという抑えがたい気持ちが自分に忍び込んでくるのを感じた (gradually a strong desire to witness this celebrated Macready in this his celebrated part stole over me)」（311）語り手は、「とうとうこの建物に入りたいという気持ちが抑えがたくなり、オーバーコートを質に入れてでも入場料に換えようかと考えかける (So powerfully

in the end did the longing to get into the edifice come over me, that I almost began to think of pawing my overcoat for admittance.)」(312)のだが、その時突然、「一見、労働者風の感じがする男(a man who seemed to be some sort of a working-man)」が「間違いなく善意がこもった声で(in a voice unmistakably benevolent)」(312)話しかけてくる。

“Take it,” said he, holding a plain red ticket towards me, full in the gas-light. “You want to go in; I know you do. Take it. I am suddenly called home. There — hope you’ll enjoy yourself. Good-bye.” (312)

「これをあげるよ」とその男はガス灯の光を浴びて輝きながら言うと、私に地味な赤いチケットを差し出した。「中に入りたんだろう。俺には分かるよ。これを取るときな。家から急に呼び出しがあったね。さあ、これで楽しめるだろう。じゃあな」

この労働者風の男はなにゆえ語り手が劇を見たがっていることが判ったのであろうか？それはまさしく白らの実体験からに他ならないと思われる。おそらくこの男は語り手と同じく、劇が見たくても金が無くて見られない悔しい思いを体験してきたのであろう。既にここに「自分のして欲しいことを他人にしてやる」という黄金律の教えの実践が見られるのであるが、語り手はまだそれに気づいていない。

この労働者風の男が語り手に差し出したものは劇場への再入場を許可してくれる半券であった。押し付けられるがままに半券を受け取ってしまった語り手は、見知らぬ労働者からのこの「施しもの(charity)」に「驚き、戸惑い、しばしの間恥づかしい思いに駆られた(quite astonished, bewildered, and for the time, ashamed)」未、「これを使ってよいものか？(Shall I use it?)」(312)と自問する。これを機に語り手は、「施しもの(charity)」について考察することになる。

— Charity. — Why these unvanquishable scruples? All your life, nought but charity sustains you, and all others in the world. Maternal charity nursed you as a babe; paternal charity fed you as a child; friendly charity got you your profession. . . . (312)

施し物と聞くと、なぜにこのような抑えがたいためらいが起こるのであろうか？お前の全人生を支えてきたものはまさに施しに他ならないし、これは世界中のだれにとっても同様なのだ。赤ん坊のおまへは母親の施しによって乳を貰い、子どものおまへは父親の施しによって食物を貰い、友人の恵みによって職を得てきたのだから。

そう思い至った語り手は、「哀れむべき、みすぼらしい、卑しい自尊心(pitiful, poor, shabby pride)」(312)を捨てて建物の中に入っていくことにする。

入り口から建物の内部に入り、階段を登っていくと、なぜか語り手に“the First Temple”の階段を登っていった記憶がよみがえる。「踊り場(platform)」に出た語り手は番人に半券を見せ、いよいよ場内に入ろうとすると、交響楽の響きを耳にする。するとまた故国のあの塔にいて聞いたオルガンの調べを思い出す。このように今居る劇場と“the First Temple”を結び付ける機能は視覚に寄るといふよりもむしろ、音であり、臭いであり、その場の雰囲気であるといった五感に訴えかけるものである。それゆえ場内に入った語り手は「次の瞬間、あの“the First Temple”の」塔にあった通気窓のガーゼ状の金網が魔法によって目の前に再現されたかのごとく、あのときと同じ息の詰まりそうな熱風がもう一度自分の肺の中に飛び込んでくる(Next moment, the wire-woven gauzy screen of the ventilating window in that same tower, seemed enchantedly reproduced before me. The same hot blast of stifling air once more rushed into my lungs.)」(313)のをいち早く感じるのである。そして日もくらむほどの高さから下をのぞいた語り手は「the First Temple」の最上階に立っている(I stood within the topmost gallery of the temple.)」錯覚に陥る。しかし語り手はすぐに“the First Temple”のときとの違いに気づく。

But hardly alone and silently as before. This time I had company. Not of the first circles,

and certainly not of the dress-circle; but most acceptable, right welcome, cheery company, to otherwise uncompanied me. Quiet, well-pleased working men, and their glad wives and sisters, with here and there an aproned urchin, with all-absorbed, bright face, vermillioned by the excitement and the heated air, hovering like a painted cherub over the vast human firmament below. (313)

しかし以前と違い孤独でもなければ閑ともしていない。今度は仲間がいた。一流の仲間でもなければ、ドレスの着こなし仲間でもない。こんなことでもなければ連れもない私にとってはこの上なく受け入れやすい、心から歓迎すべき陽気な仲間である。物静かで心満ち足りた労働者たちとその妻や姉妹たちだ。あちこちに前掛けをかけ、遊びに熱中して顔を輝かせた男の子もいて、興奮と熱せられた空気によって頬を赤らめ、眼下の人間が作った蒼穹に描かれた智天使のごとく飛び回っている。

最後に登場する男の子の描写からは、生まれた境遇の違いから不遇な扱いを受けていることが「熱せられた空気 (the heated air)」によって表現されているが、それにもかかわらず、それをものともしない力強さが伺える。この劇場に入る前、語り手は自分の望みを次のように表現していた。

Besides, what I wanted was not merely rest, but cheer; the making one of many pleased and pleasing human faces; the getting into a genial humane assembly of my kind; such as, at its best and highest, is to be found in the unified multitude of a devout congregation. (311)

その上、私が望んでいたのは休息のみではなく、喜びを与えてくれるものなのだ。人々の顔を喜び、かつ喜ばれる顔にしているものであり、同胞の温かく人情味のある集まりに加わることであり、いわばその最良にして最高の形が、多くの敬虔な会衆が一堂に集まる場所で見出されるものなのだ。

ここに見られる様に、語り手が“the First Temple”に求めたのもまさにこの「喜びを与えてくれるもの (cheer)」であり、「多くの敬虔な会衆が一堂に集まる」場所なのであり、それが実現される場所こそが語り手にとって本物の「教会」と言えるのである。そして今、何とこの「最良にして最高の形」が教会ならぬこの劇場で実現しつつあるのである。

こうしてすっかり本物の「教会」にいる感覚に陥ってしまった語り手は本能的にポケットの中を探って祈禱書を取り出そうとし、ここは祈りの場所でないことを思い出す。そして「しばしの心神喪失状態 (momentary lunacy)」(313)に陥っていた語り手は、ふと意味ありげに肘を小突かれて、はっと我に返り、思わず振り返ってみると、「襦袢を纏ってはいるが、気立ての良さそうな少年が、客をもてなす手つきで一種のコーヒー沸かしと茶碗を私に差し出しているのを目にする (I saw a sort of coffee-pot, and pewter mug hospitably presented to me by a ragged, but good-natured looking boy)」(314) ことになる。語り手と少年との間で先ず次の会話が交わされる。

“Thank you”, said I, “I wont take any coffee, I guess.”

“Coffee? —I guess? — Aint you a Yankee?” (314)

なぜ売り子の少年は語り手がアメリカ人だと分かったのであろうか? 理由は二つ挙げられている。一つは“ale”を“coffee”と誤認してしまう英・米の生活習慣の相違から、もう一つは“think”ではなく“guess”を常用する言語習慣の違いから分かったのである。語り手の“ale”を“coffee”と取り違えた誤認は対象をヴィジョンとして捉えたがゆえであり、ここでもその語り手の認識態度に反省が迫られていることも見逃せない。更に語り手と少年との間で次のような会話が続く。

“Well dad’s gone to Yankee-land, a seekn’ of his fortin’; so take a penny mug of ale, do Yankee, for poor dad’s sake.”

.....

“I don't want it, boy. The fact is, my boy, I have no penny by me. I happened to leave my purse at my lodgings.”

“Never do you mind, Yankee; drink to honest dad.” (314)

少年が語り手に“ale”を御馳走するのは、慣れない異国で奮闘している父親を思うが故である。マタイ伝第7章12節には「さらば、凡て人に為られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ」という「黄金律 (the Golden Rule)」と言われている教えが登場する。これは既に語り手に半券をくれた労働者風の男が実践していたことであるのだが、この場面で、再度それがまだ年端もいかない少年によって実践されているのである。

「奢ってもらった1ペニー分の“ale”を飲んで不思議にも減入った気分から生き返った (that unpurchased penny-worth of ale revived my drooping spirits strangely)」語り手は「元気の源はあの大麦の麦芽汁にあった—その有難いホップのほろ苦さはえも言われぬものであった (Stuff was in that barley-malt; a most sweet bitterness in those blessed hops.)」(314)という感想を述べている。この「ほろ苦さ」こそがまさに「地の塩」の味なのである。大いなる「愛」ではなくても「喜び (cheer)」を与えたり「慈善 (charity)」を施すという形で「地の塩」は効力を発揮するのである。この経験を経て語り手は「襤褸を纏った少年でも王子のような恩恵を施す人になれるのだ (A ragged boy may be a prince-like benefactor.)」(314)ということを学ぶ。これは見かけで判断して“three ragged little boys”を教会堂から追い出した“TEMPLE FIRST”の寺男の価値基準とは対極をなすものである。

語り手が身を置くこの「高々とした棧敷 (lofty gallery)」は「まさに劇場全体の中で最も安い席である (being the very cheapest portion of the house)」にもかかわらず、「およそ百フィート下ではあるが、張り出したステージを真正面に見据える位置 (with the expanded stage directly opposite, though some hundred feet below)」にあり、「劇場全体を一望の下に収めること (commanding . . . the whole theatre)」ができる故、語り手はまさに「メインマスト・ヘッドに (at the very main-mast-head)」(314)立っている気分になる。おそらく“The Two Temples”の語り手には捕鯨航海に出た経験は期待できないであろうから、これは凶らずも作者 Melville の経験が思わず反映された個所であると考えられる。*Moby-Dick*の中で語り手 Ishmael は「静まり返ったデッキの頭上百フィート (a hundred feet above the silent decks)」(*Moby-Dick*, 156)に立つ気分と意義について丸々一章 (Chapter 35 The Mast-Head)を割いて考察している。

「そして幕が開き (now the curtain rises)」(314)始まった名俳優マクレディの演技は、それが演技であると思わせないほどの名演技で観客を魅了する。語り手は思わず「このリシュリュウ (枢機卿の名)こそ、天下に冠たる名優ではないか! (Excellent actor is this Richelieu!)」(315)と漏らしているが、これは“the First Temple”の聖職者＝単なる役者、“the Second Temple”の名優＝真の聖職者という逆転現象を示すと同時に、俳優の名のマクレディを挙げるべきところでわざと間違えて役名のリシュリュウを挙げているところに語り手ならぬ作者 Melville の教会および聖職者に対する強烈な皮肉が感じられる。

#### 4. 結 び

“TEMPLE SECOND”のパートの最後で語り手は次のように述べて、この“two-part piece”を締め括っている。

I went home to my lonely lodging, and slept not much that night, for thinking of the First Temple and the Second Temple; and how that, a stranger in a strange land, I found sterling charity in the one; and at home, in my own land, was thrust out from the other. (315)

私はわびしい宿に帰り、第一の教会堂と第二の教会堂のことが頭にこびりついて離れず、その夜はよく眠れなかった。異境の地にあつて、異邦人たる私がこの教会堂で真の慈善を見いだしたというのに、故郷にあつては、つまり自国にあつては、あの別の教会堂から突き出されてしまったということをお

れることができなかったのである。

まさに正真正銘の教会である筈のマンハッタンの“the First Temple”は、「喜び (cheer)」も与えられず「慈善 (charity)」も受けられない故、いかに「地の塩」の教えを説こうが「単なる真似物 (mere mimicry)」(315) をしている劇場に過ぎず、逆に本来は単なる劇場であったはずのロンドンの“the Second Temple”こそが「喜び」と「慈善」に満ち溢れていた故、語り手にとっては本物の「教会」であったのである。

### Works Cited

- Melville, Herman. “The Two Temples.” In *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*. Vol. 9 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*. Ed. Harrison Hayford et al. Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1986, 303-15.
- . *Moby-Dick or The Whale*. Vol. 6 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*. Ed. Harrison Hayford et al. Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1988.
- Sealts, Merton M., Jr. “Historical Note” In *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*. Vol. 9 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*, 457-533.
- 『旧新約聖書』(文語訳) 日本聖書協会, 1982年。